教会にて

上野　新

「どうして、あなたは生きているのですか？」
その問いかけを私に投げかけた目の前のシスターは、神に仕える者らしく聖母のような笑みを湛えながらじっと私を見つめている。
寂れた教会。いまいち要領を得ない先の質問の答えを待つシスター。そして、私。
はて、私は何故こんな状況に身を置かれることになったのだろう。
記憶を辿り、経緯を思い出そうとするが、途端に私の頭は激しい痛みを訴える。そうして、まるで脳内に靄がかかったかのように不明慮になってしまうのだ。
うーむ、これは困ったぞ。ぼんやりとした意識の中で、どこか他人事のように呻く。
私がうなっている間も、シスターはにこにことこちらの様子をずっと窺っている。
「……あのう、一つお聞きしても、よろしいでしょうか」
「なんでしょう？」
「私は何故、ここにいるのでしょうか？」
私が問いかけるとシスターはますます笑みを深めた。
「それは、これから分かります」
これから分かるとは、どういうことなのだろう？　疑問を解消するために質問したはずが、その疑問はますます深まってしまった。そうして、私がまたも頭を悩ませている間に、シスターが口を開いた。
「私からも一つ、よろしいですか？」
「あっ、は、はい、なんでしょう？」
「あなたには、命よりも大切なものがありますか？」
シスターからの質問に、私は思わず黙りこくってしまう。それは、明確な答えがなかったわけではなく、ただ『答えられなかった』のだ。私には

あったはずなのに。
彼女のいう、『命よりも大切なもの』が。ただ、それが思い出せない。まるで自身の脳が無理矢理に記憶を真っ黒な墨で塗りたくって検閲でもしたかのように、思い出させてくれない。
何故だ。何故思い出せない。必死に思い出そうとすればする程、ますます記憶に墨を重ねて塗られるかのように、脳が思い出すことを拒む。それに加え、無理をして記憶を掘り返そうとしているからなのか、私を苛ませる頭痛も酷くなっていく。
「づっ……痛あァっ……！」
違う。思い出せないはずがない。忘れているはずがない。私にだってあったんだ。何物にも代えがたい宝物が。そうさ、きっといまにおもいだすぞ。
「落ち着いて」
凛とした声だった。そんな声が私の脳を揺らす。
「ゆっくり、深呼吸をしてください。」
彼女の声に導かれるように私は深く息を吸い、そして吐こうとする。まぁ、しようとしただけで、実際は浅い呼吸しかできなかったわけだが。それだけの行為でも、私の頭からは痛みは霧散し、取り乱したことによって失われていた冷静な思考も取り戻せたようだ。
それでもしばらくは、まるで息をすることすらままならない水中にでも沈められていたかのように酸素を欲していた。大丈夫だ。何も心配することはない。
「……ありがとう、ございます」
息をつき、なんとか声を出せるようになったところでシスターに対する礼を言う。彼女は何も言わずに、微笑を崩さずただこちらを見つめるだけだった。
私の頭の中では未だ先の質問へ対する答えを導き出せないでいたが、この際仕方がないだろう。『ある』と確証を持って答えられない以上は、回答を濁しておく他ない。
「あの……さっきの質問へ対する答えなのですが……よく、覚えていな

いんです」
「そうですか」
随分とあっさりした返答だ。拍子抜けしてしまった私は、悪戯が親にバレてしまった子供が言い訳をするかのように、言葉を続ける。
「その、確かにあったはずなんです……私にも。かけがえのない、大切で仕方がない何かがあったはずなんです。しかし、思い出そうとすれば酷く頭が痛んで……思い出せなくなる」
我ながらめちゃくちゃだと思った。大切なものを思い出すことはできないが、確かにそれは存在していたはずなのです、などと、あまりにも都合が良すぎる言い訳にしか聞こえない。しかし実際そうなのだ。記憶を掘り返そうとする度私を襲うこの頭痛はいったい何なのだろうか。
「質問を、変えましょうか」
彼女の声によって、私の意識は思考の渦から現実へと引き戻される。一旦考え込むとこうして周りが見えなくなってしまうことは、昔からの私の悪癖である。兎も角、シスターが気遣ってくれたのか、質問を変えてくれるというのはありがたい。
「これに、見覚えはありませんか？」
シスターがそう言って差し出してきたものは、少し古びたロケットペンダントだった。
「……？　いえ、特に見覚えはありませんが……中身を見ても？」
私の問いかけに対し、シスターは笑みを絶やすことなく頷く。シスターからの了承を得た私は、ロケットを手に取り、恐る恐るチャームを開き、中身を覗く。
果たしてそこにあったのは、屈託のない笑顔を浮かべるあどけない少女の姿を写した写真であった。
それを目視した瞬間である。脳裏に、その『映像』が雪崩れの如く現れたのは。
どこかの公園だ。青々とした空の下、様々な遊具が点々と設けられている広場で幼気な少女が楽しそうに、こちらへその無邪気な笑顔を見せている。

ロケットの中に入っていた写真の少女だ。そしておそらくこれはこの少女と親しい関係にあった『誰か』の記憶なのだろう。しかし、いったいどうしてこんな覚えのない映像を見ているのか。聴覚から取得できる情報はこもったような音で聞こえづらく。視覚からの情報は色褪せた情景として映る『映像』はまるで古ぼけた映画のフィルムを再生しているかのような様相を呈している。やはり見覚えがない『映像』――いや、『記憶』だ。

しかし何故だろうか。この映像を覗いていると、胸がざわつき、酷く焦燥感にさいなまされる。見てはいけない。これ以上先に進んではいけない。きっと後悔することになるぞ。

見てはいけない何かを察知したのか、本能が警鐘を鳴らした。しかしその間にも映像は待ってくれる筈もなく、時を止めることなく流れ続ける。

少女は未だ笑顔を絶やさずこちらの視点を担っている『誰か』に語り掛けてくる。

『楽しいねぇ、パパ！』

『■■■■■■■』

どうやら私の視点の主である人物は少女の父親だったようだ。少女の父親は何か喋ったようなのだが、肝心の声の部分に激しくノイズが入り聞き取れなくなる。

『■■■■■■■■■■■■■』

『えへへっ、そうだねぇ……あ！　見て見て、あれ!!』

少女は何かに気を取られ、遠くの方へと目線をやる。

――だめだ。そっちへ行くな。いかないでくれ。

私の謎の焦燥感は記憶が続いていくと共に増していく。何を焦っている。何を恐れている。私には身に覚えがないし関係もないはずだ。こんな平和な記憶のどこに、恐れる必要がある？

そう自分に言い聞かせる。しかし見苦しくも必死に言い聞かせている内にも私を苛む焦燥感と不安感、そしてそれによって大きく膨らんでしまった恐怖心は最早、無視することのできない程のものとなっていた。

『ほら見て！　かわいいネコちゃん！　でも、あんな道路の真ん中にいるとちょっと危ないね……』

『■■■■■■■』

少女の視線の先には猫がいるようだ。しかし、今の私にはそちらを気にしている余裕はない。ただ、一刻も早くこの記憶から目をそらして、私を支配する最低な気分からオサラバしたいという悲哀に満ちた惨めな気持ちを抱くだけだった。だがしかし、私の思いも空しく記憶はまだ続く。

『あっ！　あぶない!!』

『■■■!!』

目の前の少女がそう叫ぶと同時に、突然走り出した。その瞬間記憶の映像には大量にノイズが走り、まともな視認が難しくなる。しかも、視点の主である父親も少女の後を追って走り出したようで、眼前の光景が慌ただしく上下に揺れ動くものだから、たまったものではなかった。

少女は走る。ノイズがますます酷くなり、少女の姿もはっきり見えなくなってくる。それでも父親は必死に追いかける。とは言え、実際に父親の目に映っていたのはノイズの一つもない、綺麗な世界だったのだろうけれど。

『■て！　エ■■!!』

父親が何事かを叫んでいる。少女はもう道路へと飛び出そうかというところだった。

ノイズにまみれる世界の中で、それはやけにクリアに、視界の端に捉えられた。

それがブレーキを踏んだが間に合わずに少女と激突する直前のトラックであるということに気付くのには、時間はかからなかった。少女はどうしているのだろうか。そんな私の思考と連動するかのように、視線はトラックから少女へと移される。

少女は、道路の真ん中で全身で守るように猫を抱き、蹲っていた。

まずい。そう思った時には既に、身体は動いていた。やけにスローモーションに流れる景色の中で、私だけが世の理から逸脱しているかのように、俊敏に動いた。

そして。

『――エリカッ!!』

聞き覚えのあり過ぎる声が叫ぶのを最後に、記憶は途絶えた。
気づけば、また教会へと戻ってきていた。いや、戻ってきていた、と言うのはおかしな表現だろう。私の身体自体はおそらくここにあったのだから。シスターは以前、何も言わずにその微笑を湛えたまま、表情を崩すことなく私と相対している。今の私にはその沈黙の間はありがたかった。
あれは、私の記憶なのだろう。あの記憶が一通りの上映を終えた後、私の頭にはその記憶が私のものであると確信できる程に、しっかりと叩き込まれていた。
あの日、あの時。私は愛娘の少女であるエリカを連れて、街の中央にある公園へと足を運んでいたのだ。たしか繋忙期の仕事を終え、漸くもぎ取れた有給だったので、私はめいいっぱいエリカを楽しませてあげようと張り切っていたと思う。
「楽しいねぇ、パパ！」
「あぁ、そうだな」
娘は久々に私と遊ぶことが嬉しくてとてもはしゃいでいる様子だ。喜んでくれたようで何よりである。そうしてしばらく娘の遊び相手をしていた時だ。
「今日は晴れてよかったなぁ」
「えへへっ、そうだねぇ……あ！　見て見て、あれ!!」
エリカは何かに気を取られたようで、遠くのどこかに目を向ける。そちらの方へと俺も目線を向けると、そこには1匹の黒猫がいた。どうやら野良猫であるらしく毛並みに艶はなく、ガサガサだ。身も蓋もない言い方をしてしまえば、薄汚い野良猫だった。しかし問題はそこではない。むしろ私は猫が好きなので汚れていようがいまいが平等に愛すべき猫だと思っている。そう、その問題とは猫自体ではなく、猫がいる場所にあったのだ。
道路の真ん中なのである。少し弱っているようだし、そんなところにいればどうなるかは想像に難くないだろう。
「ほら見て！　かわいいネコちゃん！　でも、あんな道路の真ん中にいるとちょっと危ないね……」
娘もそれに気づいたのか、眉を寄せてそう呟く。しかし、猫は我々の懸

念など知らずに呑気に毛づくろいをしている。
かくして、我々の嫌な予感は的中した。
「あっ！　あぶない!!」
エリカはそう叫ぶ突然駆けだした。もしや、と思い猫の鎮座する道路の方へと目を向ける。道路の真ん中で一休みをするかのように丸まっている猫。しかし、場所が場所だ。道路と言えば当然そこを通るものがある。
「エリカ!!」
それを目視した私も娘の名を叫び、後を追うように駆ける。道路の向こうからやって来ていたのは、私の想像し得る中でも最悪の予想を体現したもの──大型トラックだった。
（ちくしょう……!!　間に合うか!?）
私はとにかく必死に走った。想像した最悪の未来像を叶えぬ為に。
「待て！　エリカ!!」
私は叫んだ。できる限り声を張り上げ、これ程までに喉を酷使することは今までも、そしてこれからもないだろう。しかしエリカは一向に止まらない。
エリカは遂に道路へと飛び出した。トラックはもう猫のすぐそばまで迫っている。娘は猫を抱きしめ蹲った。
ぶつかる。そう思った時には既に体は動いていた。
「──エリカッ!!」
そう叫ぶと同時に、私は娘を猫ごと突き飛ばした。その直後に感じたのは浮遊感。それが自分がトラックに撥ねられ、宙へ吹き飛んだ際に生じた感覚なのだということに気付くと同時に私の身体は地面へと落下した。
遠くから人の悲鳴のようなものがぼんやりと聞こえる。しかし、私にはもう身体を動かすだけの余力もなく、そのままゆっくりと意識は闇に飲み込まれていった。
あぁ、そうだ。そうだった。私は、
「死んだのでしたね」
口にしてしまえば、案外すんなりと自分の死を受け入れられるものだな、と、他人事のように思う。

「思い出せたようで何よりです」
目の前のシスターは依然として慈愛の眼差しで私を見る。そういえば、生まれたばかりのエリカを見る妻も、こんな眼差しをしていた。
「最後に一つ聞きたいことがあるのですが」
私には一つだけ、気がかりなことがあった。
「娘は、エリカは無事なのでしょうか」
私の問いに対して、シスターは慈愛を一層深めた声色で答えた。
「ええ、もちろん」
その答えを聞き、安堵の溜め息を漏らす。その瞬間、私の体も薄まっていることに気付いた。
どうやら生前の記憶を思い出し、未練と呼べるものもなくなったため、もうじき成仏するらしい。段々と自我が薄れてゆくのが分かる。
「ありがとうございました」
完全に消えてしまう前に、私はシスターに礼を言う。それが合図であるかのように、私の消滅が急速に早まっていく。
「どういたしまして」
そうして消える間際、もう視界すらも眩い光に包まれて何も見えなくなった私の耳に、シスターの穏やかな返答の声が届く。
それを最後に、私の意識は完全に途絶え、魂は消滅した。